

# 初七日

しよなぬか

「中陰<sup>ちゆういん</sup>」とは「中有<sup>ちゆうゆう</sup>」ともいわれます。人がこの世の生を終えてから、次の世に生をうけるまでの存在であるといわれ、その期間は四十九日であるという古来からの説がもととなっています。輪廻<sup>りんね</sup>転生<sup>てんしやう</sup>ということばがあります。人は生まれかわり死にかわりして六道<sup>ろくどう</sup>——地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上——をめぐるという思想です。

中陰は、この六道のいずれにも定まらない状態のことで、閻魔大王<sup>えんま</sup>のもとで七日ごとに裁判をうけ、四十九日には死者の先きさきが定ま

## 中陰とは

るというのです。ですから悪道におちぬよう、親族縁者があつまって法要を営み、善根<sup>ぜんこん</sup>功德<sup>くどく</sup>をつみ、その果報<sup>かほう</sup>を亡き人にさしむけようとする



のです。これが、他宗（浄土真宗以外）の中陰法要です。

しかし浄土真宗の七日七日のおつとめは、右のような意図のもとに行われるものではありません。浄土真宗の門信徒は、ご本尊の阿弥陀如来によって間違いなくお浄土に救われるのです。したがって、七日のおつとめは、亡き人を偲びつつ、亡き人をお救いくださる阿弥陀さまのお徳をたたえる法会<sup>ほうえ</sup>（仏法のあつまり）です。